

「文字を見る、絵を読む——日本文学とその媒体」

## 江戸読本に於ける文字と絵画

丁亥歳麦秋升八日 於日仏会館

千葉大学 高木 元

発表題目に用いた「絵画 (peinture)」と云う語彙は適切ではなかった。「文字 (lettre)」に対する装幀や意匠一杯を含めた非文字情報という意味で用いたかたので「画像 (image)」の方が相応しかったように思う。

読本とは江戸時代中期（十八世紀）から後期（十九世紀）にかけて大量に出版された「ジャンル」の呼称で、江戸小説中では一番知的で格調高いものといつて差し支えない。従来の文学史では中期に上方で出版された短編怪談奇談集である『雨月物語』に代表される「前期読本」と、後期に江戸で出版された中長編稗史小説である『南総里見八犬伝』に代表される「後期読本」（＝江戸読本）とに概括分類されてきた。

一般に「絵（解き）本は低俗である」乃至は「通俗な本には絵が入っている」と云う、絵入本に対する近代的な文学（価値）観が存する。しかし、近世期の小説に関する限り「絵入本」でないものは甚だ少ない。とすれば、近世小説は「通俗」で「低俗」なものであると云うことになり、従来の日本文学史の言説では、近世小説は勸善懲惡に墮して近代小説に對して劣ったものであると位置付けられてきた。尤も、明治期に入って成った近代小説と云っても十九世紀の間は（扱われた内容は兎も角も）江戸時代と変わり映えがしなかったし、明治二十年代に活版印刷本が整版本の出版（版）数を越えるまでは、整版本の様式を色濃く残した組版を採用した物が多く、何を以って近代小説と位置付けるかと云う点をも問題にする必要があると思われる。

ところで「読本」と云う語彙は「絵本」に対してもいられるようになつたと考えられるのであるが、同時に「読本」は隨所に風俗歴史考証が散りばめられた近世小説中で最も格調の高い知的な読み物なのであった。つまり、近世期の「絵入本」（筋を備えた上で挿絵等を備えた本）と「絵本」（筋がなく絵の鑑賞を主とした本）とは区別して理解する必要が在る。

例えば、宝永七（二七一〇）年の絵入淨瑠璃本『太閤記大全』（鱗形屋板）の後印本に付された表紙には外題の上に「繪入讀本」とある。淨瑠璃本が読み物として享受されていたことは云うまでもないが、其處に挿絵が施されて絵入本として刊行され「絵入讀本」と名づけられていたことが分かる。このケースはジャンルの名称ではないが、〈挿絵入りの読む本〉と云う意味相で付けられたことは明らかである。尤も、挿絵入の小説である浮世草子などでも「風流讀本」などと云う呼称が使われていたので、「讀本」と云う名称は「絵入」であることとは対立していなかつたと思われる。

化政期（十九世紀）に入ると、板本の挿絵は作者の下絵に基づいて画工（浮世絵師）が描くものとなつた様である。

大約草紙物語の刺入画を見て。その好歹をいふ者ハ。画の巧拙をのみ論じて。本文の意に違ると。違ざるとと思はぬも多かり。縱その画ハ巧也とも。蛇足の為に画れしハ。只是作者の面目を。損ざるものあること稀也。かゝる故に。予ハ画を学ざりけれども。とし来著す物の本ハ。必ずから画稿をものじて。その題を画者に示して。もて画せしといふものなし。

曲亭馬琴『近世説美少年録』第二輯「附言」（文政十三（一八三〇）年）

絵入本と云つても挿絵画家が勝手に描いたものではないのである。それのみならず、見返や刊記広告などの意匠や口絵目録の飾り枠の模様まで事細かに画工に指示していた。これらのこととは、現存している稿本や校合本、また饒舌な馬琴の言説などから分かる。

江戸読本に関する限り、原本の本文のみ成らず口絵挿絵などにも作者の意図が反映したもののと見做して差し支えないと思われる。ただし、時に画工が勝手に描く場合もあつたようで、馬琴が

然けれども画工の意をもて。そを潤色する処。動もすれバ本文の意に。違ふ事なきにあらず。譬は這書の前輯なる。摺針山の画中にも。又その次なる巻の画にも。いかにそやかくはあらじ。と思ふ画像のありけるを。よく觀る人ハ知りぬべし。纔一巻に二頁なりける。刺入画すらかくの如し。况本文に至てハ。誤脱を正し漏せるも多かり。總て印本ハ人に誂へて。書せ画するものなるに。又板木師の刊遺し。鐫愈るも少からず。

と記しているように、一筋縄ではいかなかつたようだ。

江戸読本は比較的高価な本であつたので、一般的には貸本屋を通じて読まれていた。事情は明治期に入つてからも同様で、数多くの後印本が流布していた。しかし、これらの後印本は摺りが悪いだけでなく、板元の都合で改題されたり口絵挿絵が改刻されたりすることもあり、後印本からは直接作者の意図を汲み取ることはできない。ただ、加えられた改変にはそれなりの合理的な理由が存したはずで、享受史を知る資料としては見過しがたい。

【付記】在仏の読本は国立図書館（BnF）をはじめとして装飾美術館図書室（MAD）、東洋語図書館（BULQ）、ギメ美術館（Guimet）などに多数所蔵されており、一〇〇五年以来の佐藤悟氏を代表とする科研や極東学院のマルケ氏の援助と主導によって調査ができたこと感謝申し上げる。